地域集会施設の建築設計論における地域と接点をもつ主題とその具体化

公共文化施設の建築設計論における領域構成による地域性とビルディングタイプ(3)

THOUGHT ON DESIGN THEORIES OF PUBLIC HALL
BY CONTEMPORARY JAPANESE ARCHITECTSStudy on regionality from the point of view of space composition and building types
in design theories on public architecture (3)

井上 翔太*, 峠 昇汰**, 谷川 大輔***

Shota INOUE, Shota TOGE and Daisuke TANIKAWA

This study is to illustrate thought on regionality from the point of view of space composition in design theories on Public hall by contemporary Japanese architects after the Second World War. Firstly, the contents each design theory on Public hall were analyzed, and several descriptions of “The subject” were extracted. Next, the meaning of these comments was analyzed by applying the method created by Jiro Kawakita. Then, there were drawn a relationship diagram and 5 groups of meaning were found. Next, those meanings were divided into two different types; “Phenomenon value and Physical value”. Secondly, the contents each design theory were analyzed again, and several descriptions of “The Realization by space composition” were extracted. And the space compositions were analyzed. Finally, Between “The subject” and “The Realization by space composition” were analyzed. Then, 3 Patterns were found. Further, the change of that relationship in terms of time was considered.

Keywords : public hall, contemporary Japanese architects, design theories, space composition, regionality, building types

地域集会施設, 現代日本の建築家, 建築設計論, 領域構成, 地域性, ビルディングタイプ

1. 序

1.1 本論の目的

わが国では2011年3月11日の東日本大震災以降、地方や地域に注目が集まっており、より市民に近い新しい公共施設の在り方が模索されている^{注1)}。特に住民の日常生活に最も身近な社会教育施設である公民館やコミュニティセンターといった地域集会施設^{注2)}は、災害時における避難施設としての見直しに加え、日常的にみんなが集まる場所として、また復興後の地域コミュニティの再形成の拠点施設としてなど、近年の公共施設建設における新しい公共性や地域性^{注3)}に関する議論の中心となっていると言える^{注4)}。このような社会的状況を考慮すると、現代の地域集会施設を設計する建築家^{注5)}は、いかなる水準で地域と接点をもちうる空間とすかといった、地域における社会的枠組みに関する思考を具体化することが求められていると考えられる。しかし現代において、地域集会施設を設計する建築家が、こうした地域との関係をどのように考え、また具体的な建築に反映しているかという思考の総体は曖昧であると言える。したがって本論では、現代の建築家の地域集会施設の建築設計論^{注6)}において、どのように地域と関わりをもつテーマとしたかといった地域と接点をもつ主題の意味内容を検討し、さらにその主題が建物のどの場所に具体化されているかを領域構成によって整理し、地域と接点をもつ主題との対応を分析することで、建築家の地域における社会的枠組みに関する思考^{注7)}の一端を明らかにすることを目的とする。この地域における社会的

枠組みに関する思考を具体化する建築家の思考は、建物を地域において意義あるものとする上で重要な内容を含むものと思われる。この地域に限定にした社会的枠組みに関する建築家の思考をここでは、建築家の考える地域性とし、その内容の一端を明らかにする^{注8)}。

わが国における現代の地域集会施設は、コミュニティセンターや生涯学習センターのように多様な機能を有し、地域コミュニティの形成を目指した複合施設であるが、その原形は公民館^{注9)}にみることができる。わが国における公民館は、1947年には教育基本法が、1949年には社会教育法が制定され、社会教育の中心施設として全国の市町村に数多く建設されてきた^{注10)}。しかし近年の公民館は、1973年のコミュニティ振興政策や1990年制定の生涯学習振興法などによって^{注11)}、単に学習や集会の場としてだけでなく、多様な文化活動や生涯学習の機能を有する複合施設へ、またまちづくりなど地域のコミュニティ形成の中心となるコミュニティ施設へと変化していると言える。したがって本論では、このような公民館の複合化や時代的な役割の変化などを考慮した上で、公民館やコミュニティセンターといった公立の集会施設を地域集会施設^{注12)}と捉え、その建築設計論から建築家が建物と地域との接点をどのように捉え具体化してきたのかを、通時的傾向とともに分析するものである。

1.2 既往の研究

これまで地域集会施設に関する論文では、公民館の機能や利用実態について建築計画学的に分析したもの^{注12)}や、公民館の在り方を地域計画・都市計画学的に分析したもの^{注13)}、公民館の内部機能の歴

* 鳥根県庁 修士(工学)

** 日本国土開発㈱

*** 近畿大学工学部建築学科 講師・博士(工学)

Shimane prefectural government, M.Eng.

JDC Corporation

Assoc. Prof., Faculty of Eng., Dept. of Architecture, Kindai Univ., Dr.Eng.

史的発展について分析したもの^{注14)}など公民館に関わる研究を中心に数多くある。また公共文化施設に関する論文も、建物の形態構成と使用用途の関係や対応からビルディングタイプ^{注15)}を明らかにしようとした建築構成論的研究などがある^{注16)}が、本論のような現代日本の建築家の地域集会施設の設計論を題材とし、建築家の設計思想を明らかにする研究は見出し難い。また建築家の言説に関する研究には、建築家の言説の記述構造を捉えるもの^{注17)}や、建築ジャーナリズムにおける建築家の批評表現を分析するもの^{注18)}などがあり、また本論のような現代の建築家の複数の設計論に関する研究は、戦後「新建築」に掲載された住宅の設計論の主題を分析したもの^{注19)}などがある。しかし、本論のように現代の建築家の公共文化施設に関する複数の設計論から、地域と接点をもつ主題を総体的かつ相対的に位置付け、さらにその具体化の対応を分析することから、建築家の社会的枠組みに関する思考を具体的な建築空間に投影するまでの設計過程を明らかにするものは見出し難い。また筆者らは既報の研究^{注20)}から、公共文化施設の設計論の内容には、ビルディングタイプ^{注21)}毎にも特徴があり、この詳細な分析と比較検討が、今後の公共文化施設の在り方や、公共性や地域性の議論を進める上で重要な内容を含んでいることを導いた。このような視点から筆者らは前報2編^{注22)}に続き、公共文化施設の中でも地域コミュニティの形成を目的とした地域集会施設の設計論を題材として、建築家の考える地域に関する思考の一端を明らかにしようとするものである。

1.3 本論の対象資料

本論では、現代の複数の建築家の設計思想を総体的かつ相対的に分析する資料として、戦後「新建築」誌^{注23)}に掲載された建築設計論を対象としている。これまでも、商業ジャーナリズムである戦後「新建築」誌を資料対象とすることに関しては批判的な意見^{注24)}もあるが、筆者らも十分に検討・検証を重ね、戦後「新建築」誌が長期間（分析対象期間である1945年から現在2016年まで）記録の意味合いの強い専門誌として出版されていること、また建築家の論説を含めた作品発表誌として広く認知されていることなどから、本論のような複数の建築家の設計思想を総体的かつ相対的に分析する資料対象として「新建築」誌が適していると判断している。また本論では、戦後「新建築」誌に掲載されている論説のうち、設計された作品（写真や図面）と共に掲載され、建築物の設計における建築家の設計思想が明確に読み取れる論説を建築家^{注25)}の建築設計論^{注26)}として取り上げている。

さらに本論では、公共文化施設の建築設計論のうち、建築家の地域との関わりが読み取れる地域集会施設の建築設計論を分析対象としている。現在でも地域集会施設は、公民館だけでも全国に14,681館（平成23年10月現在）^{注27)}あり数多く存在する。本論ではこうした地域集会施設の建築設計論のうち、『新建築』誌に掲載された現代の建築家の建築設計論に限定して分析するものであり、限定した範囲での考察ではあるが、それらは相対的に現代の建築家の認識の一端を示し、さらには今後の地域集会施設あるいは公共文化施設の設計論的視座を得ることができると考えている。

1.4 本論の概要と分析方法

そこで本論ではまず、資料とした現代日本の建築家の地域集会施設に関する論説をすべて通読し内容を十分理解した上で、建築家が**地域と接点をもつ主題**^{注28)}として読み取れる部分を抽出する。例えば図1の抽出例No.16-1のように「この公民館において、私たちは、建物と緑の活性化、野生化との直接的なからみあいの中で、総体としての緑の復権をめざしている。」といった部分を**地域と接点をもつ主題**として抽出することができる。このように抽出した複数の地域と接点をもつ主題の意味内容を、KJ法^{注29)}を用いて分類・整理して関係図を描き意味内容の広がり提示する。本論では、複数の建築家の設計思想を総体的かつ相対的に分析する方法としてKJ法をもちいている。抽出した主題をカード化し、カードをもちいて意味の近いもの同士をグループ化し、それぞれの関係性を検討して意味内容の関係図を描いている（図2）。このようにKJ法は、個々の設計論の内容や文脈などを超えて、複数の建築家の設計思想の枠組みを総体的かつ相対的に位置付け、意味内容の関係図を描くに適した方法であると考えている。次に、その地域と接点をもつ主題がどのように具体化され建物に反映されているかといった部分を抽出する。例えば、抽出例No.16-1は「表現としては、端的に建物を緑で覆い尽くし、まわりの緑にわけこませてしまう手法をとっている。」といった部分を、**地域と接点をもつ主題の具体化**として読み取ることができる。このように抽出した具体化の内容を、地域と接点をもつ主題が、建物のどの場所に反映させているかといった視点で領域的に整理・分析を行う。さらにこれら地域集会施設の建築設計論における地域と接点をもつ主題とその具体化との対応関係を通時的傾向とともに考察することで、建築家の地域における社会的枠組みに関する思考^{注30)}といった抽象的な概念を具現化する設計思想の一端を明らかにする。

<p>NO. 16-1 新建築1977年11月号『クッサー空間をひきさくもの』 樋口裕康 今帰仁村中央公民館</p> <p>環境の蘇生の方法として、新たなものの導入よりも、まずあるものの本来の意味をとりもどし、活性化させる手法がある—私たちは、その手法を「潜在資源の活用」と呼んでいる。自然世界では特に、水・緑の活性化を対象とする。この公民館において、私たちは、建物と緑の活性化、野生化との直接的なからみあいの中で、<u>総体としての緑の復権をめざしている。</u>表現としては、<u>端的に建物を緑でおおい尽くし、まわりの緑にわけこませてしまう手法をとっている。</u>ウッド・ロース、ブーゲンビリアなどの成長の早い亜熱帯性のつた類が、今は丸裸のフレームをさらしている屋根にかかっているバゴウの各柱に1本ずつそえられた丸太を伝わって、4,5年後には、建物を緑で覆ってしまうだろう</p>	<p>★地域と接点をもつ主題 緑の復権を目指す</p> <p>『物的価値』 《自然景観との連続》</p> <p>■主題の具体化 建物を緑でおおい尽くす (境界)</p> <p>今帰仁村中央公民館</p>
<p>NO. 46-1 新建築1989年9月号『〈第二の自然〉としての建築』 長谷川逸子 藤沢市湘南台文化センター</p> <p>私は建築の実践として〈第二の自然としての建築〉というコンセプトを掲げてきた。…「ブラザ」はペンチング・メタルの日除け柵、ステッド・ガラスをちりばめたバゴウ、からくり時計の樹、光と風の樹などの装置が配置され、構成されている。さらに屋上には小屋根群の間や地球儀や宇宙儀のまわりを回遊する散策路を巡らせた。そこには約200種の植物を植え込み、風や光や音の装置と共に四季の変化を演出する空中庭園ともいえる空間が展開する。外観は土のイメージをもたせるように土壁風色調の仕上げで、柱状摂理を想わせるランダムなリブ付壁にしつこいを重ねたり、数種類の諧調のはつりを施してある。このように、<u>自然の中にある豊饒な様相をここに実現させたいと考えた。</u></p>	<p>★地域と接点をもつ主題 第二の自然としての建築</p> <p>『物的価値』 《自然景観との連続》</p> <p>■主題の具体化 外観 - 散策路 - ブラザ (境界) (外部a) (外部b)</p> <p>藤沢市湘南台文化センター</p>

図1 抽出例 図1注)下線部を「地域と接点をもつ主題」、太字を「地域と接点をもつ主題の具体化」として抽出している。また太字斜体を、「地域と接点をもつ」ことの抽出根拠としている。

『現象的価値(127)』

図2 主題の意味内容の関係図

図2注) 各々の意味内容の下に数字は資料番号の通し番号である。また、図中において棒線により示したのは意味内容のつながりの強いもので、矢印で示したものは意味内容が背反するものである。ひとつの論説より複数の主題が抽出されたものは、さらに添え番号をつけた。

2. 地域と接点をもつ主題

まず、地域集会施設の建築設計論における地域と接点をもつ主題の意味内容をKJ法を用いて分類・整理すると、いくつかの意味のまとまりをみいだすことができ、それらを図示したのが図2である。その結果まず大枠として、地域集会施設が建つことで生じる活動や意味等の現象的な側面に着目した内容の『現象的価値』^{注27)}と、建物や地域の実体的な側面に着目した内容の『物的価値』で捉えた。これらは、建物を具現化したまた社会化する建築家の思考を、物(建物)自体の価値に着目したものか、また物(建物)を背景としたさまざまな事柄に着目したもので大きく分類・整理したもので、この前者を『物的価値』、後者を『現象的価値』とした。つまり『物的』の対概念として『現象的』を用いている。この『現象的価値』(127/166)と『物的価値』(39/166)の主題の数を比較すると、『現象的価値』として捉えられる内容が大半を占め、このことから現代の地域集会施設の設計者は、建物が建てられることで生ずる活動や意味等の現象的な側面に着目した内容を主題とすることが多いことが分かる。

2.1 現象的価値

まず『現象的価値』は《集団活動の拠点》、《自由な溜まり場》、《地域社会の構築》の3つの内容で捉えられた^{注28)}。このうち《集団活動の拠点》は《アクティビティの創出》と《文化創造の広場》の2つの内容として捉えることができた。この《アクティビティの創出》は、多様な人びとの空間体験を引き起こす場となる(8)^{注29)}や、日常の住民の生活の発展を期待する(97-2)など様々な活動の場の提供を目指すものの、また、人びとの賑わいを創出する場となる(55-3)や、内部の活動が外部にあふれ出すことをイメージする(76-1)など[活動]として捉えられるものが主に含まれる内容である。この他には、様々な活動を許容し市民の自主的参加を促す(75-2)ものや、空間に豊かな視覚的变化をもたせる(72-2)ものなども含まれる。近年では特に、住民参加のワークショップやまちづくりなどと共に地域の活動の核となる施設を目指すものも見られる。これに対し《文化創造の広場》は、住民の多目的なコミュニケーションの場としての機能をもたせる(52-3)や、住民相互が交流できる場になる(66-2)などのように地域集会施設を住

民の交流の場となることを目指すもの、住民同士の出会いの場をつくる(13)など「交流」として捉えられるものと、地域の文化醸成の場となる(15-2)や、地域の新しい文化拠点となる(45-1)など文化創造の場としての在り方を模索する内容として捉えられるものがある。これらは地域集会施設を使う住民の交流やネットワークの構築を促し、地域における文化創造の拠点となる広場のような空間を目指したものである。

次に《自由な溜まり場》は【建物への愛着の形成】と【市民への開放】の2つの内容として捉えることができた。まず【建物への愛着の形成】は、親しみやすい建築として和風の表現を試みた(50)ものや、地域の人びとに親しまれていた木造校舎の雰囲気イメージした(54-1)ものなど、住民にとって親しみのある空間づくりを目指したものや、通りがかりの人も気軽に出入りできるように配慮した(12)や、誰でも立ち寄ることができる建築を目指した(66-1)などの気軽に立ち寄れる空間をめざすものなどが主な内容である。この他に、建築が閉鎖的にならず住民にとってくつろげる空間を目指した(63-2)などがある。これに対し【市民への開放】は、市民にとって抵抗感のない溜り場をつくる(29)、内部が使われていない時でも周りが居場所となる「街のえんがわ」となることを期待する(87)などの市民の居場所となろうとするものや、広場をつくることによって開かれた建築を具現化する(5-2)、地域に開かれた公共の場とする(65-1)など地域に開かれた建築や人びとが「自由」に集まることのできる空間を目指した(85-1)ものなどが主な内容として読み取れる。この他、建築内部で起こる出来事が互いに分かり合える空間を目指す(22-2)や、利用者相互が気配を感じながら活動できるようにする(99-1)などの一体感を感じる空間を目指すものも多く見られ、これらはいずれも地域集会施設が住民にとって身近で親しみやすい地域の建築として認識されることを目指す主題であると言える。

さらに《地域社会の構築》も、【アイデンティティの確立】と【社会問題の解決】の2つの内容として捉えることができた。このうち【アイデンティティの確立】は、建築にシンボル性を与える(44-1)や、外観の表現によって市の顔としての在り方を模索する(63-1)など建築のシンボル化を目指したものや、地域のアイデンティティを保持する建築とした(64-1)など「象徴性」として捉えられる内容と、土着的なイメージから建築を思考した(17)や、その土地の素朴で雄々しい風土性を感じさせようとした(59)などの風土性を表現するもの、建築を風土的に関係付けて風土になじむ建築を目指した(9-3)などの「風土性」として捉えられる内容が主である。これに対し【社会問題の解決】は、日本では前例の少ないHPシェルの屋根をかける(4)や、外壁の打ち放しコンクリートの美しさに気を使った(28-3)などの「技術」の向上を目指したものや、様式や伝統を乗り越え現代の建築を目指す(18-3)、現代の生活や行動に適した建築の在り方を模索した(51)などの「時代感覚」を表現するものも含むが、地域のまちづくりの一環として建築する(37-1)や、積雪への対策から屋根の形状を考える(28-2)、まちの主たる産業である林業を守るため木材を積極的に利用する(60-1)など様々な内容を含んでいる。これらはいずれも地域の象徴としての建築の在り方や現代の社会問題への対応し、地域住民の共同体意識や帰属意識を構築したり再認識させたりすることを主題とするものである。

以上関係図から、地域集会施設が建てられることで生じる活動や意味に着目した主題『現象的価値』は、《自由な溜まり場》(49/127)、

《地域社会の構築》(44/127)、《集団活動の拠点》(34/127)の順で数が多く、中でも【建物への愛着の形成】や【市民への開放】といった内容で捉えられる《自由な溜まり場》が最も多いことがわかる。また、この《自由な溜まり場》として捉えられる内容は、他の意味内容との関連も多いことが読み取れることから、現代の地域集会施設の建築設計論において建築家は、建物に市民が自由に集まり活発な活動を生み出し、地域のコミュニティ形成のきっかけをつくるような役割をもつ場所とすることを、地域と接点をもつ主題の中心^{注30)}と考えていることを示している。

2.2 物的価値

次に『物的価値』は《自然景観との連続》と《都市環境との連続》の2つの内容で捉えられた。このうち《自然景観との連続》は、背後に存在する松山と建築の融合を目指した(7)、周辺に広がる沼の水面に馴染ませた(82-2)などの自然との調和を目指すものや、周辺の自然景観のイメージから建築の形を発想した(36-2)、海とつながる風景をつくらうとした(76-2)、周辺の自然と対峙する建築の在り方を模索した(49)など、建築を囲う自然環境と一体的に思考することによって周辺環境との連続性を生み出し、地域との繋がりを表現しようとするものである。中にはあえて自然と対峙させることで建築の存在感を周囲に対して発信しようとするものも見られた。これに対し《都市景観との連続》は、周辺の建築や街並みとの連続性を確保する(18-1)や、混みあった街区、周辺に対してできるだけシブシブな秩序を形成する(58-1)などの都市との連続として捉えられるものや、瀬戸内海の景観の構造を抽象化する(90)、古い町のイメージと雰囲気を建築に取り込む(32-3)、前面の幹線道路に対する閉鎖性を獲得する(52-2)など、建築を囲う都市環境と一体的に思考することによって周辺の都市環境との連続性を生み出し、地域との繋がりを主題とするものである。これら建物や地域の実体的な側面に着目した『物的価値』として捉えられる内容で《自然景観との連続》(27/39)と《都市景観との連続》(12/39)の数を比較すると、《自然景観との連続》が比較的多いことがわかる。この『物的価値』(39/166)に関する内容は、前節の『現象的価値』(127/166)に比べて数が少なく、地域集会施設の設計論の主題の中心的内容とは言えないが、このことは現代の地域集会施設を設計する建築家が、建物や地域の物的価値に着目して地域と接点をもつ主題とする場合は、都市景観よりも自然景観との連続性を意図することで、より有機的で豊かな文化芸術活動の場を生み出そうとしていると考えることができる。

2.3 地域と接点をもつ主題の通時的傾向

次に、表1のように地域集会施設の建築設計論における地域との接点をもつ主題を通時的に考察する。まず表1及び表3より1950年代(3/166)から1960年代(5/166)の主題数は少なく、このことから、戦後建築家が地域集会施設を設計し、その建物や設計論が建築雑誌で発表されるようになったのは主に1970年代(14/166)以降であることが分かる。また表1より、地域集会施設の建築設計論の主題数は1980年代以降に飛躍的に多くなり1980年代(47/166)、1990年代(55/166)、2000年以降(42/166)と1990年代が最も多いことがわかる。このことは、1980年代後半から1990年代前半にかけていわゆるバブル経済の好景気の時に多くの地域集会施設が建設され、この時期に建築家も多くの地域集会施設の設計に携わったと考えることもできるが、その後の不況と言われる経済状況や阪神淡路大震災、東日本大

震災などが起こった社会状況においても建築家による地域集会施設の建築設計論は多く掲載・発表されており、1980年代以降の地域集会施設は、社会状況の変化に柔軟に対応できる最も身近な地域施設として捉えられ、建築家もそれに同調し取り組んでいると考えることができる。次にまず『現象的価値』の通時的傾向に着目すると、《自由な溜まり場》の【建物への愛着の形成】が1980年代(9/47)から1990年代(11/55)にかけて多いことが分かる。1980年代から1990年代は、1960年代のいわゆる高度経済成長以降、地域住民の日常生活に必要な数の建物が建てられ、「物的な充足から(文化や豊かさといった)精神的な充足へ」といった一般的な議論が進む中で、地域集会施設が、公民館のような単独の集会機能をもつ建物から、様々な機能をもつ複合的で大規模なコミュニティ施設へと大きく変化した時期である。したがって1980年代から1990年代までの地域集会施設を設計する建築家は、それまでの画一化したイメージから脱却し、より親しみやすく透明性の高いデザインで建物への愛着を生み出し、このことで施設機能の複合化や大規模化といった複雑な様相に対応していたと考えられる。またこれに対し2000年以降は、《自由な溜まり場》の【建

物への愛着の形成】(5/42)よりも【市民への開放】(10/42)の数が多くなっている。このような2000年以降の傾向は、1995年の阪神淡路大震災以降から盛んに行われるようになった「住民参加型」による公共施設の建設過程や地域施設の在り方の再考に関する議論などによって、地域集会施設は、地域におけるコミュニティ施設としての役割が強く求められるようになったと考えられる。このような社会状況を踏まえて、地域集会施設を設計する建築家は、2000年頃を境にして、より多くの地域住民に施設を開放し積極的な利用を促すことで地域コミュニティの再構築を目指す思考に推移したと考えられる。またこれらに対し『物的価値』は全体の数は多くはないが、相対的に《都市景観との連続》(12/39)より《自然景観との連続》(27/39)が多く、特に1990年代の《自然景観との連続》(9/55)が比較的多い傾向を読み取ることができる。このことは地域集会施設を設計する建築家は、周辺の都市環境との連続性よりは自然環境と一体となった有機的な建築の在り方を思考する傾向にあり、それは近年まで続いていると考えられる。

表1 地域と接点をもつ主題の通時的傾向

年代	『現象的価値』127							『物』39	計
	《集団活動の拠点》	《自由な溜まり場》	《地域社会の構築》	《自然景観との連続》	《都市景観との連続》	《社会問題の解決》	《建物への愛着の形成》		
50's - 70's	4	3	2	1	3	5	4	22	
80's	4	2	5	9	7	7	7	6	47
90's	7	7	6	11	6	6	9	3	55
00-15	1	6	10	5	3	7	7	3	42

NO. 27 新建築1981年10月号
『幻の風景に立つ家』
(進修館) 西尾貞臣
進修館宮代町コミュニティセンター

ひとりひとりがひとつの大きな家族の一員であるとするならば、進修館は、ひとつの大きな家＝町民の誇りと希望を担う大きな屋敷と捉えることができる。

★地域と接点をもつ主題
ひとつの大きな家

『現象的価値』
《自由な溜まり場》
《市民への開放》

3. 地域と接点をもつ主題の具体化

ここでは、抽出した地域集会施設の建築設計論における地域と接点をもつ主題の具体化について検討する。まず、すべての地域と接点をもつ主題の具体化の内容を通覧し領域的にいくつかのカテゴリーに分類・整理した(表2)。全体を敷地内と敷地外に分け、敷地内をさらに内部、境界、外部に分けた。このうち内部とは、集会室や教室などがある主室部と、エントランスやロビー、廊下などの動線部を含む市民が利用可能な建物の内部空間である。また境界とは、建物の外形、バルコニー、外壁、屋根など主に建物の外観を指す。さらに外部は、広場や中庭など配置による外部(a)とロビーや屋上庭園など建築化された外部(b)を含む外部空間である。また敷地外は、公園や住宅地など

表2 地域と接点をもつ主題の具体化の領域的広がり

分類	敷地内			敷地外		計		
	内部	境界	外部	近接	遠隔			
具体化の例	主室部	動線部	外部a	外部b	民家 近隣施設	山並み 海		
	集会室 和室 教室 会議室	エントランス 回廊 ロビー 廊下	トアライト 配置 バルコニー 外壁	広場 通路 ロビー 屋上庭園	水田 道路 住宅地 公園	森 川 歴史の町並み		
単数領域	●	●	□	●			8 17 12	37
	敷地内	隣接A	●	●	●	●	●	4 18 6 2
隣接B		●	●	●	●	●	4 9 8 3	54
非隣接		●	●	●	●	●	2 3 3	2
敷地外		隣接	●	●	●	●	●	2 2 2 3 8
	非隣接	●	●	●	●	●	1 5 3 1 2 2 3 2 3	61
	敷地全体						23 2 3	12
							166	

No. 75-2 新建築1999年8月号

『開かれている活動の場』
長谷川逸子

ふれあいエス7 塩竈

人びとはゆっくりとスロ-プを巡りながら、インターネットをする人、芝生で走りまわる子どもたちとかかわり、いつでも参加するきっかけがとくめるような開放性をこの施設はもっている。この一見がらんだ内部空間は利用勝手が固定されなかったため、さまざまな活動を許容し、市民の自主的参加を促すよう意図されている。

■主題の具体化
内部空間
↓
主室部-動線部
複数領域 敷地内：隣接

No. 90 新建築2008年3月号

『粒子から全体を構成する農業的コミュニティ』
隈研吾
呉市音戸市民センター

われわれの提案のテーマは屋根、瓦によって構成される瀬戸内海の景観の構造を抽象化し、建築にすることでした。周辺景観のモデルではなく、周辺となじみながらも何かふわっと浮かんでくる屋根を目指しました。

■主題の具体化
屋根、瓦-瀬戸内海の風景
↓
境界-敷地外：遠隔
複数領域 敷地外：非隣接

No. 75-2 新建築1999年8月号
『開かれている活動の場』
長谷川逸子
ふれあいエス7 塩竈

人びとはゆっくりとスローを巡りながら、インターネットをする人、読書をする人、芝生で走りまわりたい子どもたちとかかわり、いつでも参加するきっかけがつかれるような開放性をこの施設はもっている。この一見がらんだ内部空間は利用勝手が固定されないため、さまざまな活動を許容し、市民の自主的参加を促すよう意図されている。

■主題の具体化
内部空間
↓
主室部-動線部
複数領域 敷地内：隣接

No. 90 新建築2008年3月号
『粒子から全体を構成する
農業的コミュニティ』
隈研吾
呉市音戸市民センター

われわれの提案のテーマは屋根、瓦によって構成される瀬戸内海の景観の構造を抽象化し、建築にすることでした。周辺景観のローではなく、周辺となじみながらも何かふわっと浮かんでくる屋根を目指しました。

■主題の具体化
屋根、瓦-瀬戸内海の風景
↓
境界-敷地外：遠隔
複数領域 敷地外：非隣接

の敷地と隣接関係にあるもの**近接**と、山並みや川、湖といった敷地から離れた場所にある**遠隔**に分けた。また、上記のような領域的な分類が出来ないものを**敷地全体**とした。

また主題は、内部、境界、外部、といった単数の領域内で具体化されるだけでなく、複数の領域の関係性によって具体化されるものも多くみられた。そこでそれらを具体化の領域的広がりとして捉え、複数の領域と関係をもつものを線で結んだ。さらに具体化の領域的広がりを、他の領域と関係をもたない**単数領域**と、複数の領域と関係をもつ**複数領域**の2つに分類・整理した(表2)。また具体化の領域的広がりにおける複数領域を、敷地内の関係による**敷地内**と、敷地外と関係をもつ**敷地外**に分け、さらにそれぞれ領域間の関係性を考察するために、領域同士が連続した関係にあるものを**隣接**、不連続な関係にあるものを**非隣接**として分類した。この隣接関係にあるものとは、主に人間の移動が可能な建築空間の連なりを示すものであり、これに対し非隣接関係にあるものとは、主に領域の隣接関係をを超えて眺望や人間の視覚的つながりに着目したものであることができる。さらに、敷地内の隣接関係にあるものを、外部との

関係を持たず、建物内の領域のみの関係性による**隣接A**と、外部との関係性をもつ**隣接B**として分類した。また内部の主要部には、室同士の関係によって具体化するものも見られたので、これらを隣接Aに分類した。

これらをもとに地域集会施設の建築設計論における具体化の領域的広がりを表2のように整理すると、地域集会施設の地域との接点をもつ主題の具体化は、**単数領域**(37/166)^{注31)}と**複数領域**(117/166)では、複数領域の方が多いことが分かる。これは地域集会施設の建築設計論において建築家が地域との関わりを具現化しようとする際には、複数の領域間の関係性によって表現しようとする傾向にあることを示しており、このことは既報の研究^{注21)}と比較しても公共文化施設の建築設計論の中で地域集会施設のもつ特有な傾向であると言える。また**複数領域**に着目すると、**敷地内**の領域間の関係性によるもの(56/117)と**敷地外**の領域との関係性によるもの(61/117)では、同程度の数を読み取ることができる。このことは、地域集会施設の建築設計論における地域と接点をもつ主題の具体化では、敷地内の領域同士の関係性だけでなく、敷地外の領域を含む空間の連

表3 資料リストと地域と接点をもつ主題の具体化の領域的広がり

資料 掲載 番号	掲載 年月	敷地内					敷地外		論文名・執筆著者名	建物名	資料 番号	掲載 年月	敷地内					敷地外		論文名・執筆著者名	建物名		
		内部 主室部動線部	境界	外部 外部A 外部B	近接	遠隔	内部 主室部動線部	境界					外部 外部A 外部B	近接	遠隔								
56	1969	コ							コミュニティセンター 千木良公民館※ 青根公民館※ 伊賀上野公民館※	菊竹清訓 木村昭也 木村昭也 坂倉雅三	石橋文化センター 千木良公民館 青根公民館 伊賀上野公民館	55	9407	コ							不可視なる風景へ	相田武文	川里村ふるさと館
60	4	6011	公						岡山県総合文化センター※	足立光典	岡山県総合文化センター	56	9407	コ							新たな自然主義	隈研吾	橋原町地域交流施設
65	6	6207	コ						八女市公民館※ 流山市公民館※ 新しい空間を求めて	光吉健次 佐藤彰 福戸正臣	八女市公民館 流山市公民館 和気町中央公民館	57	9409	コ							公的領域としての商空間	栗生明	植山・カヅ・カヅベータ
70	8	7008	公						過疎の中のコミュニティセンター	安田臣	アザビ 佐治	95	58	9501	コ						視線の交錯と自由な 交流がつかないゾーンの	長谷川逸子	すみだ生涯学習センター
9	7109	コ							和気中央公民館日笠分館※	高松伸	和気中央公民館日笠分館	60	9507	コ							昭和町農村環境改善センター※	青島裕之	昭和町農村環境改善センター
10	7303	公							多摩川町公民館※	川島幸士	多摩川町公民館	61	9507	コ							小国町隣保館※	葉祥栄	小国町隣保館
12	7404	コ							御代田町のための設計メモ	東孝光	御代田町福祉センター	62	9601	コ							筑穂町内住コミュニティセンター※	葉祥栄	筑穂町内住コミュニティセンター
13	7405	コ							かんなぎと明日のコミュニティ	小田切洋	大沢コミュニティセンター	63	9604	コ							多様ななかの建築	高橋寛	横浜市中野台地区センター
75	14	7511	公						輝との暮らしを求めて	柳川一	青山町中央公民館	64	9606	福							東松山市南地区市民活動センター※	白村龍三	東松山市南地区市民活動センター
15	7705	福							「まんぼ」	宗正敏	北勢町福祉センター	66	9702	コ							市民活動センター※		
16	7711	公							クラック空間をひきさくもの	樋口裕康	今帰仁村中央公民館	65	9702	コ							農村施設の活躍	里村力	八多ふれあいセンター
80	17	8005	公						鶴島町中央公民館	岡田新一	鶴島町中央公民館	66	9704	コ							敷地の「切開」「地層」の開出	武澤秀一	所沢市中富南コミュニティセンター
18	8007	コ							津和野における保存とまちづくり	小池一臣	津和野コミュニティセンター	67	9707	コ							切実な建築	山本理順	横浜市下田泉地区センター
19	8007	コ							穂高町民会館※	杉森格	穂高町民会館	68	9709	コ							横浜市長谷地区センター※	柳澤清	横浜市長谷地区センター
20	8009	コ							設計概要	内井昭蔵	新井原市民文化会館・公民館	69	9710	コ							谷渡の家	若月幸敏	横浜市長原地区センター
21	8009	コ							設計ノート	谷口吉生	北原町役事・コミュニティセンター	70	9710	コ							もうひとつの家	中村勉	浪合ファーム
22	8010	コ							横浜市金沢センター※	伊藤毅	横浜市金沢センター	71	9802	コ							四谷区民センター※	北代禮一郎	四谷区民センター
23	8103	コ							都市・外層・場	小野正弘	富士見市立戦線コミュニティセンター	72	9805	公							岡山県立生涯学習センター※	芦原義信	岡山県立生涯学習センター
24	8109	コ							ぼどがや地区センター	仙田満	横浜市ぼどがや地区センター	73	9809	コ							木と水の館	本田真吾	君津市八重原公民館
25	8109	コ							串木野市福祉コミュニティセンター※	押田健雄	串木野市福祉コミュニティセンター	74	9903	コ							おらほーる※	後藤茂	おらほーる
26	8109	コ							玉名市文化センター※	美川洋而	玉名市文化センター	75	9908	コ							開放系地域センター	今村雅樹	太田市総合ふれあいセンター
27	8110	コ							幻の風景に立つ家々進修館>西尾貞司	進修館宮代町立コミュニティセンター	76	9908	コ								開かれています活動の場	長谷川逸子	ふれあいバザ 塩竈
28	8211	公							飯山市中央公民館※	宮本忠長	飯山市中央公民館	76	9908	コ							群島ファームの建築	長谷川逸子	桂浜ふれあいセンター
29	8307	コ							掛川市生涯学習センター※	一ノ宮寛治	掛川市生涯学習センター	77	0003	コ							玉川地区活性化センター※	若松信行	玉川地区活性化センター
30	8411	コ							三ヶ日町民センター※	平井圭雄	三ヶ日町民センター	78	0007	コ							「わが」化された住宅街のなかで	室伏次郎	横浜市長谷地区センター
85	31	8509	公						鎌馬公民館※	岡秀隆	鎌馬公民館	79	0101	コ							国見町生涯学習センター※	塚塚隆生	国見町生涯学習センター
32	8511	コ							足助からの提案	松村慶三	足助文化センター	80	0108	コ							「みんなの家」から「ここらの森」へ	三橋満	みんなの家
33	8603	コ							湘南大庭市民センター※	綾形雅彦	湘南大庭市民センター	81	0203	コ							市民施設としての形象化を目指して	飯田善孝	横浜市長谷地区センター
34	8603	公							夢前町中央公民館※	前川治彦	夢前町中央公民館	82	0208	コ							我孫子市生涯学習センター※	岡田新一	我孫子市生涯学習センター
35	8612	公							二の宮公民館※	高橋統一	二の宮公民館	83	0310	コ							地域の人々の大きな家	広谷純弘	大山町福沢地区コミュニティセンター
36	8612	福							働く婦人・母・子のための「こゝろ」センター	遠藤勝助	弘前市社会福祉センター	84	0402	コ							街に開き、街の日々と一体化へ	池原義郎	737 しまで地域交流センター
37	8703	公							まちづくりの只中で	武澤秀一	所沢市松井公民館	85	0407	コ							木の柱の林立する大層根の空間	安藤忠雄	加古母村ふれあいコミュニティセンター
38	8703	コ							遠賀コミュニティセンター※	美川洋而	遠賀コミュニティセンター	86	0411	コ							建築と種類	西沢大良	延岡町林業総合センター
39	8711	コ							千歳世教育文化センター※	菊竹清訓	千歳世教育文化センター	05	87	0501	集						空間を対照のワザで「す」から導き出す	佐賀大輔	佐賀市生涯学習センター・遠東交流館
40	8712	コ							世田谷区立船橋地区会館※	長島孝一	世田谷区立船橋地区会館	88	0505	コ							風景の刻印	岡田新一	山形市山形文化複合施設
41	8804	コ							五反田地区環境改善センター※	寺本和雄	寺本和雄	89	0611	コ							農業と建築	岡田新一	高島市食と農の交流施設
42	8804	コ							矢野町農村環境改善センター※	寺本和雄	寺本和雄	90	0803	コ							親子から全体を構成する農業的コミュニティ	隈研吾	呉市普戸市民センター
43	8811	コ							志賀町民センター※	藤城義文	志賀町民センター	91	0810	コ							屋根の建築	広谷純弘	富山市小見地区コミュニティセンター
44	8812	コ							稲城カインフォーム※	納賀正明	稲城カインフォーム	92	0810	コ							風景の壁	広谷純弘	富山市大庄地区コミュニティセンター
45	8812	コ							世田谷区立九品仏地区会館※	納賀正明	世田谷区立九品仏地区会館	93	0904	コ							ありそうでなかったもの	高橋晶子	平井町地域交流活用総合交流施設
46	8909	コ							<第二の自然>としての建築	長谷川逸子	藤沢市湘南台文化センター	94	1005	コ							都市市生涯学習センター・遠東交流館	栗生明	山形市山形文化複合施設
90	47	9002	公						松伏町中央公民館※	阿佐佐昭彦	松伏町中央公民館	95	1010	コ							風景の刻印	高宮眞介	村山市総合文化複合施設
48	9211	コ							「川崎市大山街道ふるさと館1991」に関するノート	富永謙	川崎市大山街道ふるさと館	96	1010	コ							住民の活動を発信する建築	西倉淳	三郷市立バティ交流センター
49	9301	コ							山道の風景	高砂正弘	高砂市中央公民館	97	1211	コ							町の拠点となる、開放的な木造建築	加藤謙	豊富町定住支援センター
50	9310	コ							鹿角市高齢者生きがいコミュニティセンター※	宮本和雄	宮本和雄	98	1312	コ							地域のための建築	柳澤清	函子市地域活動センター「コンパ」グランド
51	9312	コ							世田谷区立下馬地区会館※	新屋千秋	世田谷区立下馬地区会館	99	1405	コ							さまざまな開かれた場所	妹島和世	なかまちファミリー小市民センター
52	9402	公							姫路市城西の西公民館※	横内敏人	姫路市城西の西公民館	100	1505	公							多様な行為を空間のなかで受け止める	堀部安朗	鎌倉山集会所
53	9404	コ							神原コミュニティセンター※	亀谷清	神原コミュニティセンター	101	1507	集									
54	9405	コ							玖珂町東部地区コミュニティセンター※	村重保則	玖珂町東部地区コミュニティセンター												

表3注) 論文名の横にある※は解説文であることを示す。さらに、分類欄は 公: 公民館、コ: コミュニティセンター、福: 福祉センター、集: 集会所を示している。

統性も重視されていると言える。さらに敷地内の領域間の関係性によるものは、ほとんどが隣接 (54/56) 関係によるものであることが分かる。また外部空間を含まない隣接 A (30/54) と、外部空間を含む隣接 B (24/54) でも同程度の数を読み取ることができるが、その内容を細かく見ると、主室部と動線部 (18/30) の関係性によって表現するものが多いことが分かる。またここで単数領域に着目すると、主室部や動線部など内部空間の特定な場所 (8/37) で具体化するものは少なく、ほとんどが建築の外観や外形などの境界 (17/37) や広場や中庭などの外部空間 (12/37) であることが分かる。またこれらに対し敷地外と関係をもつ具体化は、非隣接 (43/61) 関係によるものが多く、特に敷地外・遠隔の環境要素と建築の外観や外形などの境界とを結びつけて表現するものが多い (23/43) ことが分かる。これらのことから、まず地域集会施設の建築設計論において建築家が敷地内で地域と接点をもつ主題を具体化しようとする場合は、室同士、室と廊下、外部と内部、など隣接した空間の相対的な関係や連続性によって具体化するか、建築の外観か外部空間で具体化することが多いことが分かる。これに対し地域集会施設の建築設計論において建築家が敷地外との環境要素と結びつけて具体化しようとする場合は、建物からの眺望より、敷地外の環境要素やイメージを建物の外観に反映させて表現することが多いことを示している。

続いて地域集会施設の建築設計論における具体化の領域的広がりを通時的傾向を分析した (表 4)。この結果、1950 年代から 1970 年代までは明確な傾向は読み取ることが出来ないが、相対的に複数領域の敷地内：隣接 (7/21) が多いことが分かる。この傾向は 1980 年代以降も続き、1980 年代 (18/42) 1990 年代 (19/49) における地域集会施設の建築設計論の地域と接点をもつ主題の具体化は、複数領域の敷地内：隣接が最も多いと言える。しかし同時に複数領域の敷地外：非隣接も 1980 年代 (11/42) と 1990 年代 (13/49) と比較的多く、さらに 2000 年代以降は、複数領域の敷地外：非隣接 (16/42) が、敷地内：隣接 (10/42) の数を上まっていることが分かる。このことは、地域集会施設を設計する建築家の地域と接点をもつ主題の具体化は、2000 年頃を境として、隣接する領域間の相対的な関係性や連続性など建築の空間構成による具体化から、地域を象徴する敷地周辺の環境要素やイメージを建物の外観に表現するような建築の外形表現による具体化に、その中心が推移したことを示している。

4. 地域と接点をもつ主題とその具体化の対応

前章までは、地域集会施設の建築設計論における地域と接点をもつ主題とその具体化の内容について別々に検討してきたが、本章ではその対応について検討する。まず、地域集会施設の建築設計論における主題の大枠として捉えた『現象的価値』、『物的価値』と、主題の具体化の大枠として捉えた領域的広がりにおける単数領域、複数領域との対応関係を検討した (表 5)。その結果まず、主題の『現象的価値』と具体化の領域的広がりにおける複数領域との対応 (81/166) が最も多いことが分かる。また特にその内容を細かく見ると、『現象的価値』は複数領域の敷地内：隣接 (53/81) が多いことが分かる。このことから、地域集会施設の設計において建築家は、建物を建てることによって生ずる活動や意味など現象的価値に基づいた主題を、敷地内における隣接した空間同士の相対関係や領域間の連続性によって具現化することが多いことが分かる。このことは地

表 4 主題の具体化の領域的広がりの通時的傾向

年代	領域的広がり	単数領域 37					複数領域 117				計	No. 74-1 新建築 1999年3月号 『開放系地域域々々』 太田市総合ふれあいセンター 今村雅樹 開放系の空間のつくりえを施し「コミュニケーション重視」の構成をとった。 各部屋をつなぐ廊下はエンドに歩き回れる「パブリック」形式をとり、歩くことで情報収集ができるように「ギャラリー機能」をもった廊下の壁は透かされ、視覚コミュニケーションのつながりが意図された。 ■主題の具体化 各部屋・廊下 ↓ 複数領域 敷地内：隣接
		敷地内					敷地外					
		内部	内部	境界	外部	隣接	非隣接	隣接	非隣接			
主室	動線											
50's		1	3	3	7	4	3	21				
70's		1	4		18	1	7	11	42			
80's		1	1	3	6	19	1	5	13	49		
90's		3	1	7	3	10	2	16	42			
00's	-15s											

表 4 注) 表中の網掛けは各年代の中で最も多く見られた内容を示している。

表 5 主題とその具体化の領域的広がりとの対応

領域的広がり	主題	『現象的価値』 127		『物的価値』 39	
		単数領域 37		複数領域 117	
		敷地内	敷地外	敷地内	敷地外
単数領域	37	16	12	35	2
複数領域	117	53	12	14	29
敷地全体	12	11	1	36	1

表 5 注) 表中の網掛けは多く見られた内容から順に濃い網掛けをしている。

表 6 主題とその具体化の領域的広がりとの対応の詳細

地域と接点をもつ主題		『現象的価値』 127					『物』39		計	No. 37-2 新建築1987年3月号 『まちづくりの只中』 武澤秀一 所沢市松井公民館 人と人の出会いが場を生み出すのであり、出会いの場こそが地域をつくり地域をささえる。…地域の人の出会いの場となるギャラリーが、ホールの外周にひろがる。水紋状にひろがる床タイルのハッチは7のロチとしてコネドへと連続し、本当の「外」となる。																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
		『集團活動の拠点』		『自由な環境』		『地域の社会的機能』	『自然景観との連続』	『都市景観との連続』																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
		文化創造の広場	アクティビティの創出	市民への開放	建物への愛着の形成	アイデンティティの確立	社会問題の解決																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
領域的広がり	具体化の広がり	主題	単数領域		複数領域		敷地内敷地外		敷地内敷地外																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
			内部	主室	内部	主室	隣接	非隣接		隣接	非隣接																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
			動線	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

表 6 注) 表中の濃い網掛けは傾向が顕著に表れている部分、薄い網掛けは傾向が読み取れる部分を示している。表中の①②③はパターンを示している。

表 7 主題とその具体化の領域的広がりとの対応の通時的傾向

領域的広がり		具体化の 主 題	地域と接点を もつ 主 題	『現象的価値』				『物的』				計	No. 82-1 新建築2002年8月号 『我孫子市 生涯学習センター』 岡田新一 我孫子市生涯学習センター 戦後の干拓と開発により、 今ではほとんど享受 できなくなつてしま つた高台からの手賀沼 眺望の復活を企図し、 屋上をうねりのある大 地に見立てた。その際 、対角線方向が沼に向 かつて下がるような起 伏とし、屋上の緑が公 園に連続して沼へとつ く視界をつくり出し ている。手賀沼を借景 としていた武者小路実 篤邸の庭からの系譜で ある。 ★地域と接点をもつ主題 手賀沼眺望の復活 ↓ 『物理的価値』 《自然景観との連続》 ■主題の具体化 屋上 - 手賀沼、公園 ↓ 複数領域 敷地外：非隣接		
				《集团活動の拠点》		《自由な 遊び場》		《地域社会の 構築》		《自然景観との連続》				《都市景観との連続》	
				文化創造の広場	7 ク リ ティ ビ ティ の 創 出	市民への開放	建物への愛着の形成	7 イ ン テ リ ー の 確 立	社会問題の解決	自然景観との連続	都市景観との連続				
単数領域	境界	50's -70's					2	1		3					
		80's		1			1	2		4					
		90's		1			2			3					
		00-15			1	1	5			7					
		敷地内隣接	50's -70's	1	2		1	1	2	1	7				
複数領域	敷地外非隣接	80's	4	1	4	2	3	3	1	18					
		90's	4	4	3	4	2	2		19					
		00-15		3	6	1				10					
		敷地内隣接	50's -70's					1	2		3				
		80's				2	1	3	4	4	11				
90's					2		9	2	13						
00-15		1	1	2	3	1	6	2	16						
敷地全体						11		1	12						

表 7 注) 表中の濃い網掛けは傾向が顕著に表れている部分、薄い網掛けは傾向が読み取れる部分を示している。表中の①②③はパターンを示している。

域集会施設の建築設計論において顕著な傾向を示しており、建築家の地域と接点をもつ主題とその具体化の対応における中心的内容であると言える。また『現象的価値』は、単数領域の**境界**（16/35）と**外部**（12/35）、複数領域の**敷地外：非隣接**（14/81）と**敷地外：隣接**（12/81）との対応が多いことが分かる。これらに対し『物的価値』は、複数領域の**敷地外：非隣接**（29/36）との対応が比較的多く、**単数領域**（2/166）によって具体化することはほとんどないことが読み取れる。これらのことから、地域集会施設の設計において建築家は、建物や地域の実体的な側面に着目した物的価値を主題とする場合は、周辺の自然や都市といった敷地外の環境要素やイメージと建物と結びつけるような視覚的つながりによって具現化することが多く、外観や広場など特定の部分に象徴的に表現されることは少ないことが分かる。

次に、表6のように地域と接点をもつ主題とその具体化の対応を細かくみると、大きく3つのパターンを読み取ることができた。まず①『現象的価値』の内容では、『**集団活動の拠点**』の【**アクティビティの創出**】や、『**自由な溜まり場**』の【**市民への開放**】といった主題が、具体化の領域的広がりにおける複数領域の**敷地内：隣接**との対応が多いことが分かる。このことは地域集会施設の設計において建築家は、住民の積極的な活動を促したり住民が自由に利用できる開かれた建築を目指したりするような、地域集会施設に求められる住民同士のコミュニケーションの場としての在り方を主題とする際には、内部の空間同士の相対関係や内部と外部の連続性など空間的つながりによって具体化しようとする傾向にあることを示している。次に、②『現象的価値』の『**地域社会の構築**』の【**社会問題の解決**】といった主題は、具体化の領域的広がりにおける単数領域の**境界**との対応が多い。このことは地域集会施設の建築設計論において建築家は、立地する地域の気候・風土への対応や産業・技術力の向上など、地域社会の構築に必要な社会問題への対応を主題とする場合、建築のファードや外形、外壁などの外観に象徴的に表現しようとする傾向にあることを示している。これらに対し③『物的価値』の内容では『**自然景観との連続**』が、具体化の領域的広がりにおける複数領域の**敷地外：非隣接**との対応が多いことが分かる。このことは建築家が、建物と自然景観との連続性を主題とする場合は、敷地周辺の環境要素やイメージを建築のファードなどの外観に結びつけるような視覚的つながりによって具体化されることが多いことを示している。この傾向は地域集会施設の建築設計論の地域と接点をもつ主題と具体化の対応において最も数が多く顕著な傾向を示すものではあるが、他のビルディングタイプ^{注21)}でも多く見られ、公共文化施設の建築設計論の特徴であると言える。

さらに、表7のように主題とその具体化の対応の通時的傾向を①、②、③に着目して考察すると、まず①（主題の『現象的価値』と主題の具体化の複数領域の**敷地内：隣接**との対応）は、1980年代から1990年代までは『**集団活動の拠点**』や『**自由な溜まり場**』それぞれに分散した傾向にあるが、2000年代以降は『**自由な溜まり場**』の【**市民への開放**】に比較集中した傾向を読み取ることができる。また②（主題の『現象的価値』『**地域社会の構築**』と主題の具体化の単数領域の**境界**との対応）も、2000年頃を境に【**社会問題の解決**】の増加傾向を読み取ることができる。さらにこれに対して③（主題の『物的価値』と主題の具体化の複数領域の**敷地外：非隣接**との対応）は、1990年代に最も集中した傾向を読み取ることができるが、2000年

代以降減少傾向にあることが読み取れる。これらのことから現代の地域集会施設を設計する建築家は、2000年頃までは、多様な芸術文化・交流活動が可能な集会施設として複合化する機能や施設の大規模化に対応し、隣接する領域間の相対的な関係性や連続性など建築の空間構成によって地域との接点を表現するなど、地域性の多様な表現の可能性を模索していたが、2000年以降は、地域施設そのものの在り方を再考するような社会的状況に対応し、地域のコミュニティ形成の拠点施設としてより開放的なイメージを建物の外観に表現するといった建築の外形表現によって地域性を表現する思考に推移していることを示している。しかし、これら現代の地域集会施設の建築設計論における地域と接点をもつ主題とその具体化は、この3つのパターンの内に形式化した傾向を読み取ることができ、さらにこの傾向は2000年頃を境として、地域集会施設における建築家の地域性の表現が、空間構成の修辭的操作によるものから、建物の外形のイメージ表現へと推移し偏りを強めていることを示すものと考えることができる。このような地域集会施設の建築設計論における傾向は、近年の建築家の考える地域性に関する思考の偏りを示すものであり、この偏りを見直すことが今後の地域集会施設の設計や新しい公共文化施設の計画に必要であると考えられる。

5. 結

本論は、建築家によって著された戦後の地域集会施設の建築設計論の中から、地域と接点をもつ主題とその具体化を検討することで、現代日本の建築家が考える建築の地域性の意味の広がりを示した。そのためにまず、ここで取り上げた資料において抽出した地域と接点をもつ主題の意味内容をKJ法をもとに分析を行い、建物が建てられることによって生じる活動や意味など現象的な側面に着目した内容と、建物や周辺の環境の実体的側面に着目した内容として大枠を捉え関係図を示した。そこでは現象的な内容が多く、特に建物への愛着の形成や市民への開放といった自由な溜まり場を形成しようとする内容が地域と接点をもつ主題の中心にあることを示した。またその主題の通時的傾向から、2000年頃を境に住民にとって親しみやすく、気軽に訪れることのできる地域集会施設の在り方を模索する内容から、地域に開かれ多くの人びとの積極的な利用を促す内容に推移したといった、建築家の考える地域集会施設の公共文化施設としての認識の変化を示した。次に、抽出した地域と接点をもつ主題の具体化を領域的に整理し、その広がりとして、他の領域と関係をもたないもの（単数領域）、複数の領域と関係をもつもの（複数領域）の2つのまとまりとして大枠を捉えた。また、複数の領域と関係をもつもの（複数領域）は、敷地内の関係によるもの（敷地内）と敷地外と関係をもつもの（敷地外）で捉え、さらに空間的つながりを示す隣接と、視覚的なつながりを示す非隣接に分けて分析を行った。この結果、地域集会施設の建築設計論では、敷地内における特定の場所によって具体化することよりも、複数領域の特に隣接の関係性によって地域に関わる主題を具体化することが多いこと。またその中でも、敷地内の空間的つながりや敷地外の環境要素と建物の外観をむすびつけるような視覚的つながりによる具体化が多いことが分かった。また通時的な傾向から、地域集会施設の建築設計論における地域と接点をもつ主題の具体化も、2000年頃を境に、隣接する領域間の相対的な関係性や連続性といった建築の空間構成による具体

化から、地域を象徴する敷地周辺の環境要素やイメージを建物の外観に表現するといった外形表現による具体化に変化したことを明らかにした。

最後に、地域と接点をもつ主題とその具体化の対応から、①アクティビティの創出や市民への開放に関する主題は、内部空間同士の関係性や内部と外部の連続性など敷地内の空間的つながりによって具体化されることが多いこと。②現代の地域における社会問題への対応に関する主題は、建築のファードや外形などの外観によって表現される傾向にあること。③敷地周辺の自然や都市との景観的連続性を主題とするものは、敷地周辺の環境要素と建築の外観との視覚的關係性によって具体化されることが多いこと、といった3つのパターンを導いた。またそれらの通時的傾向から、現代の地域集会施設を設計する建築家は、2000年頃までは、多様な芸術文化・交流活動が可能な集会施設として複合化する機能や施設の大規模化に対応し、隣接する領域間の相対的な関係性や連続性など建築の空間構成によって地域との接点を具体化することが多かったが、2000年以降は、地域施設そのものの在り方を再考するような社会的状況に対応し、地域のコミュニティ形成の拠点施設としてより開放的なイメージを建物の外観に具体化するなど建築の外形表現によって地域との接点とする思考に変化していると言える。しかし、これら現代の地域集会施設の建築設計論における地域と接点をもつ主題とその具体化は、この3つのパターンの内に形式化した傾向を読み取ることができ、さらにこの傾向は2000年頃を境として、地域集会施設における地域性の表現が、空間構成の修辭的操作によるものから、建物の外形のイメージ表現へと推移し偏りを強めていることを示すものと考えることができる。このような傾向を見直すことが今後の地域集会施設の設計や新しい公共文化施設の計画に必要であると考えられる。これらの結果は近年の建築家が、新しい地域性や公共性に対する考えを実現するきっかけとして地域集会施設を捉える場合にも示唆的であり、今後の公共文化施設を考える上でも重要な内容を含んでいると考えられる。

注

- 注1) 例えば、五十嵐太郎，山崎亮編著『3.11以後の建築－社会と建築家の新しい関係』（学芸出版社2014.11）など様々な東日本大震災以降の建築の在り方、建築家の在り方について様々な議論がなされている。さらに新建築2015年1月号において建築家塚本由晴氏は、論文『非施設型空間とネットワーク－ふるまいを開放する建築－』によって震災後によくみられるようになったまちづくりなどから生まれる小さな建築を非施設型の建築とよび、そのネットワークから震災後の新しい公共建築を再構築することについて語っている。
- 注2) 本論では、地域の人々が集まり、余暇活動や学習、自治活動を行うと共に、地域のコミュニティの形成を目的とし、主用途として「集会所」を有する、公民館、コミュニティセンター、生涯学習センターなど公立の集会施設を地域集会施設と定義し、その建築設計論を資料対象としている。公民館、コミュニティセンター、生涯学習センターは「地域住民のための集会を中心とした場」ではあるが、制度により各々の目的・機能あるいは管理運営等の点では異なっている。しかしいずれも公民館を原形とし、現代では複合施設として、地域のコミュニティ施設へ発展してきた地域集会施設であることから、これらを分析の対象としている。
- 注3) 本論で扱う公共性・地域性に関する内容は、既報の研究、井上翔太，谷川大輔：現代日本の公立劇場・ホール設計論における主題とその具体化 公立文化施設の設計論における領域構成による地域性とビルディングタイプ（2），日本建築学会計画系論文集，NO.725, 2016.7のP2「1.3 本論における地域性と公共性」及び注23から注26で詳述している。
- 注4) 新建築誌2013年3月号において建築家乾久美子氏、藤本壮介氏、平田晃久氏は対談『「場をつくる力」を支える建築の役割』では、「みんなの家」を巡って東日本大震災以降の地域施設の在り方について議論を行っている。
- 注5) ここで言う建築家とは、主に建築作品及び建築論をジャーナルに発表することによって、建築の表現活動としている設計者を指している。本論では特

に戦後「新建築」誌を資料とし、実際に設計した建物が紙面に掲載され、写真や図面と同時にその建物の設計に関する論説が掲載されている設計者を「現代日本の建築家」としている。限定的な範囲での考察ではあるが、相対的に現代日本の建築家の設計思想を批評しうるものと考えている。

- 注6) 本論では建築家の論説うち、戦後「新建築」誌に、設計した建物（写真や図面）が同時に掲載された論説で、かつ建築物の設計における建築家の設計思想が明確に読み取れるものを建築家の「建築設計論」として分析している。解説文であっても建築家の設計意図、設計思想が明確に読み取れるものは資料対象としている。また建築家の論説には、建物の形態、機能、管理に焦点を合わせたものや、設計に至る背景の説明、建築を通じた地域論や文化論に関する内容もあるが、その中でも地域と接点をもつ主題として明確に読み取れ、具体化に結びつけている論説は建築設計論としている。
- 注7) ここで建築家の社会的枠組みに関する主張として読み取れるものとは、建築の設計においていかなる水準で社会との接点を持たせることができるといった、建築家にとっての外的水準に関する思考が読み取れる箇所である。この外的水準とは、社会状況、都市状況、あるいは私たちの日常生活や生活水準といった広い意味での環境を、建築を成立させる背景または合理としているものである。これに対し、建築家の内的水準にのみ関わる主題とは、例えば、自身の空間に関する概念・イメージといった創作活動における建築家の内面世界に重きをおいた言説である。したがって本論では、このような内的水準にのみ関わる主題は、地域とは直接的な関連はないと考え分析対象として取り上げていない。
- 注8) 建築家の考える地域性を、地域と接点をもつ主題とその主題の領域構成によって分析された具体化との対応によって考察することから、本論ではそれを「領域構成による地域性」としている。
- 注9) 公民館について、例えば『広辞苑』（岩波書店，2008）には、「社会教育法に基づき、市町村に設置され、住民のために実生活に即した教育・学術・文化に関する各種事業を行う施設。」とある。参考文献とした、浅野平八著：地域集会施設の計画と設計（理工学者，1995）には、公民館から発展した地域集会施設の歴史と役割が述べられている。
- 注10) 1947年制定の教育基本法（社会教育）第十二条2では「国及び地方公共団体は、図書館、博物館、公民館その他の社会教育施設の設置、学校の施設の利用、学習の機会及び情報の提供その他の適当な方法によって社会教育の振興に努めなければならない。」とある。また1949年制定の社会教育法には、第五章 公民館（目的）第二十条「公民館は、市町村その他一定区域内の住民のために、実生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もつて住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とする。」と公民館が定義されている。さらに1959年に告示された公民館の設置および運営に関する基準などの様々な法令によって、公民館の水準の維持や向上が図られている。
- 注11) 1990年制定の生涯学習振興法（地域生涯学習振興基本計画）第5条には、「都道府県は、当該都道府県内の特定の地区において、当該地区及びその周辺の相当程度広範囲の地域における住民の生涯学習の振興に資するため、社会教育に係る学習（体育に係るものを含む。）及び文化活動その他の生涯学習に資する諸活動の多様な機会の総合的な提供を民間事業者の能力を活用しつつ行うことに関する基本的な構想を作成することができる」とある。
- 注12) 三国政勝，中村攻：「新旧住民の利用から見た集会所および公民館の性格－混住地域における居住環境設備の課題 その2－」日本建築学会計画系論文報告集 No. 367, pp. 63-71, 昭和61年9月
- 注13) 西野達也，神門香葉，平野吉信：「中国地方における市町村合併に伴う公民館の再編状況とまちづくり拠点化に関する考察」日本建築学会計画系論文集 No. 75, pp. 2537-2545, 2010.11
- 注14) 勝又啓太，浅野平八：「公民館建築における空間の展開過程」日本建築学会計画系論文集 No. 665, pp. 1231-1240, 2011.7
- 注15) 小川次郎，坂本一成：「公共文化施設における建築の構成とビルディングタイプ－ヴォリュームの複合から見た建築の構成形式に関する研究」日本建築学会計画系論文集 No. 486, pp. 79-88, 1996.8
- 注16) 太田英和，近藤正一，夏目欣昇，若山滋：「日本モダニズム創世期における建築家の言説の論理構造」日本建築学会計画系論文集 No. 578, pp. 213-218, 2004.4.
- 注17) 竹内正明：「戦後日本における建築ジャーナリズムへの批判的言説について」日本建築学会計画系論文集 No. 590, pp. 137-143, 2005.4
- 注18) 奥山信一，坂本一成：「戦後「新建築」誌にみられた建築家の住宅観 建築家の住宅論に関する研究」日本建築学会計画系論文報告集 No. 428, pp. 125-135, 1991.10
- 注19) 谷川大輔，奥山信一：「現代日本の建築家の設計論における公共性－建築設計論における社会的枠組みに関する研究」日本建築学会計画系論文集

No. 550, pp157-164, 2001. 12, 谷川大輔, 佐々木英子, 奥山信一:「市庁舎建築の設計論における領域構成からみた地域性－建築設計論における社会的枠組みに関する研究 (2)」日本建築学会計画系論文集 No. 595, pp. 25-32, 2005. 9

注 20) 本論でビルディングタイプとは主に、建築計画学等で用いられてきた(博物館、劇場・ホール、図書館といった)いわゆる主要用途別(機能上)の建築型を指している。本論では、後に、複数のビルディングタイプの設計論での分析結果を比較・検討することで、ビルディングタイプを横断した相対的な地域への考えや、今後の公共文化施設のあり方を検討する指針を得ることを目指している。

注 21) 井上翔太, 谷川大輔:「公立博物館建築の設計論における地域との関わりをもつ主題とその具体化－公共文化施設の設計論における領域構成による地域性とビルディングタイプ」, 日本建築学会計画系論文集 No. 718, pp. 2843-2853, 2015. 12, 井上翔太, 谷川大輔:「現代日本の公立劇場・ホールの設計論における主題とその具体化－公共文化施設の設計論における領域構成による地域性とビルディングタイプ (2)」, 日本建築学会計画系論文集 No. 725, 2016. 7

注 22) 本論では、一般建築ジャーナリズムを現代の建築家の最も自由で活発な表現領域であるという前提のもとに、それらのなかで最も代表的だと思われるもののひとつであり、しかも長期にわたって継続的に発行されている「新建築」誌を資料対象としている。公共文化施設が制度・政策の影響を大きく受けることなどを考慮して、現在の政治制度となった戦後(1945年)以降を「現代」として捉え、1945年から2016年(現在)までを対象期間としている。このような限定された範囲による報告であるため、現代の建築家の地域集会施設に関する言語的活動をすべて把握できとは言えないが、こうした研究をさらに深めるための手がかりを提案するという点では、学術的研究の試みになりうると著者らは考えている。

注 23) 西山卯三氏は『西山卯三:「戦後『新建築』誌にみられた建築家の創作の主題」に対する討論」日本建築学会計画系論文集 第461号, pp. 199-200, 1994年7月 は、現代の複数の建築家の設計思想を分析する資料として、戦後「新建築」誌を用いることに対し批判的な意見を述べている。これに対し奥山信一らは『奥山信一, 持田英明, 坂本一成:「戦後『新建築』誌にみられた建築家の創作の主題」についての西山卯三氏の討論に対する回答」においてその妥当性を述べている。筆者らは、これらを再検討した上で奥山信一らの回答を支持する立場で、戦後「新建築」誌を現代日本の建築家の設計論の資料対象としている。例えば、「編集者の意向により、掲載事例が決定している」という指摘に対しても、筆者らも「建築家の作品発表に関わる論説を検討しようとする場合、前提となるジャーナリズムの性格である」と考え『新建築』誌を資料対象としている。

注 24) 文部科学省 HP「公民館の振興」http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/001.htm による。地域集会施設の建築設計論の分析にあたり、本論では作品発表時(建設年代)をもととした通時的傾向による分析のみを行っている。この他、建物の立地場所(都市と地方など)によるちがいが、規模(床面積や複合する機能など)によるちがいが、施設形態(運営、管理など)によるちがいなどの分析が考えられ、これらの指標により、今後地域集会施設の建築設計論を詳細に分析できると考えている。

注 25) 本論では、資料とした論説を通読しそれらの内容を相互に比較検討することによって、それぞれの地域との関係が明確に読み取れる設計意図を地域と関わりをもつ主題として抽出している。その際、まず資料とした文章中に「～が主題である。」「～が目的であった。」あるいはそのように読み替え可能な表現を判断根拠として主題を抽出し、さらに抽出された「主題」のうち、具体的な地名や地域の特徴を捉えて主題と結びつけているもの、あるいは「地域」との関連性を読み取ることができる表現が読み取れるものを「地域と接点をもつ主題」としている。

注 26) KJ法とは、民族地理学の分野で川喜田二郎氏によって考案されたものとしてよく知られており、何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法の実施検証のプロセスまでの一連の方法を言う。本論では、上記の中で、ある問題をめぐって関係のありそうな情報を集め、定性的データとし意味の分かるような全体像とするまでのプロセスを狭義でのKJ法としている。資料とした設計論から抽出した主題をカード化し、意味の近いもの同士をグループ化し、さらにそれぞれの関係性を検討して意味内容の関係図を描いている。この分析では、著者らが客観性の高い内容であると判断できるまで、複数人が繰り返し分析を行っている。このようにKJ法は、複数の建築家の総体的かつ相対的な思考の枠組みや関係図を示すために用いているが、個々の言説がもっているグーテンスタム(文脈や雰囲気)は、グループ化した意味内容の中に含まれ読み取することは難しい。また本論では、主題の具体化の分類についてもKJ法を用いてグループ化し、領域的に整理を行っている。

注 27) 本論では、地域集会施設の建築設計論における地域と接点をもつ主題とその具体化の内容を分析するにあたって設定したカテゴリ以下のような括弧を用いている。

『 』 地域と接点をもつ主題の意味内容のカテゴリ項目	第1水準
《 》 地域と接点をもつ主題の意味内容のカテゴリ項目	第2水準
【 】 地域と接点をもつ主題の意味内容のカテゴリ項目	第3水準
[] 地域と接点をもつ主題の意味内容のカテゴリ項目	第4水準

注 28) ここでのカテゴリ項目のキーワードは、1973年に東京公民館資料作成委員会によって作成された『新しい公民館像をめざして』、いわゆる『三多摩テゼ』における公民館とは何か－公民館4つの役割－「1. 住民の自由なたまり場、2. 住民の集団活動の拠点、3 住民にとっての「私の大学」、4. 住民による文化創造のひろば」を参照している。

注 29) 2章1節の()内の数字は、図2のなかの数字に一致する。各々の数字は資料とした論文の通し番号であり、ひとつの論説より複数の主題が抽出されたものは、さらに添え番号をつけた。

注 30) ここで「中心」とは、地域と接点をもつ主題の意味内容の空間配置における「中心」を示している。本論では、複数人でKJ法を用いて分析を行い、意味内容の関係において、他のグループと関係が多いもの、あるいは同時に語られることが多いグループが意味内容の中心であるとして図の中央に配置している。

注 31) ここでの数量的に整理し、集計、分析する方法は、地域と接点をもつ主題の具体化の大枠としての傾向は読み取ることができるが、資料毎の特徴的な方法(例えば、大きな傾向とは異なるが、時代を変革したような特徴的な方法)は、同時に表示することは難しいと考えている。

参考文献

- 1) 日本公民館学会編: 公民館のデザイン 学びをひらき、地域をつなぐ, エイデル研究所, 2010
- 2) 日本公民館学会編: 公民館・コミュニティ施設ハンドブック, エイデル研究所, 2010
- 3) 小和田武紀編: 公民館図説, 岩崎書店, 1954
- 4) 河野通祐: 公民館 建築設計のための手引き, 井上書院, 1972
- 5) 横山宏, 小林文人: 公民館史資料集成: エイデル研究所, 1986
- 6) 浅野平八: 地域集会施設の計画と設計, 理工学社, 1995
- 7) 谷口汎邦ほか: 建築計画・設計シリーズ 11 公民館・コミュニティセンター, 市ヶ谷出版社, 1996
- 8) 日本建築学会編: 建築設計資料集成 集会・市民サービス, 丸善, 2002
- 9) 新建築学体系編集委員会編: 新建築学体系 21 地域施設計画, 彰国社, 1984
- 10) 文部科学省 国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター: 平成24年度 公民館に関する基礎資料, 2013
- 11) 川喜田二郎: 発想法 創造性開発のために, 中央公論社, 1967
- 12) 川喜田二郎: KJ法 混沌をして語らしめる, 中央公論社, 1986

THOUGHT ON DESIGN THEORIES OF PUBLIC HALL BY CONTEMPORARY JAPANESE ARCHITECTS

Study on regionality from the point of view of space composition and building types
in design theories on public architecture (3)

Shota INOUE *, *Shota TOGE* ** and *Daisuke TANIKAWA* ***

* Shimane prefectural government, M.Eng.

** JDC Corporation

*** Assoc. Prof., Faculty of Eng., Dept. of Architecture, Kindai Univ., Dr.Eng.

This study is to illustrate thought on regionality from the point of view of space composition in design theories on Public Hall by contemporary Japanese architects. Through the investigation of their published articles after the Second World War. Public Hall is important to local communities as "open regionalism facilities". After the Great East Japan Earthquake, The designers of public architecture need to think for the local community. Recently, Public architecture was developed every major application (Building types). So, The thinking about the relationship between architecture and regions is the most important for the contemporary Japanese architects. Therefore, this report were described about the thinking of relationship between architecture and regions on design theories on Public Hall. Further after this paper, the some design theories of several building types (Public Museum, Public Theater, Public Hall, Public Library, etc.) are going to be compared.

Firstly, the contents each design theory on Public Hall were analyzed, and several descriptions of "The subject" were extracted (Fig.1). Next, the meaning of these comments was analyzed by applying the method created by Jiro Kawakita. Then, there were drawn a relationship diagram and 5 groups of meaning were found (Fig.2). Next, those meanings were divided into two different groups (Fig.2) ; "Phenomenon value" and "Physical value". Then, the change of that relationship in terms of time was analyzed (Table 1).

Secondly, the contents each design theory were analyzed again, and several descriptions of "The Realization by space composition" were extracted. And the space compositions were analyzed. So, these were classified into 2 space compositions (Table 2); "Singular area" and "Plural areas". Then Singular area was classified into 3 areas; "Inside", "Exterior" and "Outside". So Plural areas were classified into 2 areas; "In site" and "Out site". "In site" is things that have no relationship with "Out site". "Out site" is things that have relationship with "Out site". Furthermore each Plural areas were classified into 2 areas more ; "Adjacency" and "Non-adjacency". As a result, "Plural areas" is the most large (Table 2). Then, the change of that relationship in terms of time was considered (Table 3).

Finally, Between "The subject" and "The Realization by space composition" were analyzed (Table 4). Then, Relationships of "Phenomenon value and Plural areas" are large. Next, from the detailed analysis, 3 Patterns were found (Table 5). (1) The subjects with Phenomenon value, "Base of a group activity - Creation of much activity" and "Free space - Opening to a citizen", are represented by "In site-Adjacency". (2) The subjects with Phenomenon value, "Construction of the community - Solution to social problem", are represented by "Exterior". (3) The subjects with Physical value, "Continuation with the natural scenery", are represented by relationship by "Out site-Non-adjacency". Further, the change of that relationship in terms of time was considered (Table 6). So, The thought on regionality of the designers of Public Hall has changed from around 2000.

Consequently, a definite meaning about thought on regionality in design theories on Public Hall was found. In this particular study, we have pointed out the design ideas of contemporary Japanese architects about public architecture after Second World War.

(2016 年 4 月 7 日原稿受理, 2016 年 10 月 12 日採用決定)